

〈論文〉

森鷗外の初期文学批評と中国小説 「現代諸家の小説論を読む」を中心に

王 憶水

はじめに

森鷗外の文芸批評「現代諸家の小説論を読む」は明治22年（1889）11月に発行した『柵草紙』第2号に掲載され、のちに改稿して明治29年12月に発行された単行本『月草』に再録された。「小説論」（明治23年1月）、「文學ト自然」ヲ読ム」（明治22年5月）、「しがらみ草紙の本領を論ず」（明治22年10月）に続いてまとまった文学理論を述べていた。韻文と散文という文体、小説の素材、実際主義と理想主義、美の独立性、単稗と複稗というジャンル等を主題として、体系的に鷗外の文学論を主張した長文である。「現代諸家の小説論を読む」に関する先行研究は主に西洋文学との関わりといった視点から論じられるものが多い¹。また『小説神髓』など同時代の文学理論への意識といった面からも論じられている。この時期の文学批評を漢文学との関連を中心とした研究は看過される傾向がある。

明治21年9月に帰国して、早速同23年に1月に最初の文学批評「小説論」を発表している。洋行帰りの鷗外は渡航中に西洋文学の知識を蓄積し、それをもって日本の文壇にも西洋文学理論をもとに新しい秩序を作ろうとしている意欲が強く、そのときに鷗外の文学世界に西洋文学は圧倒的な優位性があったに違いない。一方で、漢文

1 神田孝夫は「鷗外初期の文芸批評」（『比較文学研究』、第6号、1957年12月）に鷗外初期の批評文はゴットシャルやハイゼに学んで論を展開していることを指摘し、小堀桂一郎の『若き日の森鷗外』（東京大学出版会、1969年10月）にその影響関係について更に細かく論じている。

学は長く日本に浸透していたとはいえ、洋行前の鷗外にとっては異国風情のある外国文学である。西洋文学に触れて以降、漢文学は和文学と一緒に西洋と対立する東洋という領域に括られるようになっていく。洋行前後には鷗外における漢文学はどのように変わっていたかは一つの問題になる。

「現代諸家の小説論を読む」は前後の文章に比べれば分量も多く、鷗外自身の文学理論をまとめた形で表出しようとする意欲が見られる。この議論の中で中国小説の三作品が言及され、作品原文からの引用も行われている。洋行前の鷗外の知識は和漢洋にわたっているが、洋行の後には西洋の知識が圧倒的に主な知識源となり、知的構造が大きく変わったと言える。これらの漢文学作品の扱い方を考察することで、鷗外の漢文学に対する認識が窺え、また知の構造が大きく変動しているなか、鷗外の文学理論のあり方の一端を明らかにすることにもなると思われる。本稿では文庫所蔵本の書入れ、鷗外自身の言説及び同時代の作家と対照させながら、初期文学批評の「現代諸家の小説論を読む」における漢文学に対する鷗外の読み方を考察する。

1. 鷗外の『虞初新誌』愛好

批評の最初で鷗外は、美妙齋主人（山田美妙）と春の屋主人（坪内逍遙）の主張に賛成しながら、韻文に比べれば散文は比較的純なるものとして、近世に至って散文体が勃興することに喜んでいと述べている。馬琴の文体に生じた変化を例にあげて、前期における文体が後期になると歌らしい七五調になることを積極的に評価していない。

続いて素材の扱い方として実際派と理想派といった正反対の二種があると述べ、心理的観察法に基づく理想派の方法を提唱し、空想の加工を加えず自然の模倣に陥るのは実際派小説の短所と述べている。「水と云へば必ず濁流を写し情と云へば必ず姪欲と残忍の心とを写す」² (p.10) とし、空想の加工を加えない自然模倣だけでは小説にならないと批判し、その代表例にはゾラ、イプセン、トルストイをあげている。一方、鷗外の主張した美を基準として事実上空想を加える理想派はドーデ、ビーコンズフィールド（ベンジャミン・ディズレーリ）といった作家が代表である。

しかし、理想派とって極端に至ればかえって問題を起こし、それを「抽象的理想主義」としている。ドイツ・ロマン主義文学と日本の読本がそれにあたる。巻中の才

2 原文引用は「現代諸家の小説論を読む」（『柵草紙』、第2号、明治22年11月）による。引用する際、原文の注と傍点等を省略し、旧字体を新字体に変える。ほかの作家からの引用は同様に行い、ルビは省略する。

子佳人は類型的な人物であり、「心理的観察に依て始めて描写し得べき特殊の面目ある各箇人の才子佳人にあらず」(p.11)とした。こういった類型的な人物に対する批判と一致する『虞初新志』の序文から次の原文を引用している。

張心斎の云く＝古今小説家言。指不勝僂。大都鉅釘人物。補綴欣戚。累牘連篇。非不詳贍。然優孟叔敖。徒得其似。而未伝其真。強笑不懽。強哭不戚。烏足令耽奇攬異之士。心開神釈。色飛眉舞哉。(p.11、古今の小説家が言うことは、指を折っても数えられないほどある。殆どは人物をむやみに付け加え、喜びや悲しみ等の情緒を綴るだけである。優孟叔敖はただ似た所を得て、真意を通じていない。わぎと笑っても喜ばなく、わぎと泣いても悲しまない。どのようにして奇異を求める人の心を開き喜ばせるだろう)³

古今の小説は人物の喜びや悲しみなどの情緒をむやみに使っただけで、切実な感情が伝わらない現状に不満を感じている。明代の小説集である『虞初誌』はその点では評価すべきであるが、収録される内容はほとんど唐の時代のことである。そこで当代の奇怪なことや賢明な人物などを収録し、過去の小説より真実な感情を喚起できるような小説集を志したと述べた序文の冒頭部分である。

『虞初新志』は清の張潮によって編集され、明末清初の短編小説を集めた筆記小説であり、1700(康熙39)年に刊行され、1823(文政6)年に日本で和刻本が刊行されたが、早くも近世中期から日本で注目されている。江戸時代から明治にかけての知識人の中には明清筆記小説を愛読する風潮があり、菊池三池の『本朝虞初新誌』と依田学海の『譚海』はその流行の証となる。

『虞初新志』は主人公の愛読書としてその小説でもしばしば言及されている。鷗外後年の小説「雁」(明治44年～大正2年)及び「キタ・セクスアリス」(明治42年)に主人公の愛読書として『虞初新志』が挙げられている。鷗外文庫に『虞初新志』(和刻本荒井公廉訓点、嘉永4(1851)年補刻、大坂河内屋徳兵衛板)が所蔵されており、それを讀んだ時期については、すでに前田愛⁴の指摘がある。書入れに見える「記事丁丑初秋」は明治10年で、そのとき鷗外は『虞初新志』を讀んだ可能性があることを示している。前田氏の同時代の蔵書調査によると、『水滸伝』、『三国史』、『西遊記』、『紅樓夢』、『聊斎志異』、『虞初新志』、『閱微草堂筆記』は、鷗外、依田学海、中村正直の

3 以下の訳文は稿者によるものである。

4 前田愛、「鷗外の中国小説趣味」、『言語と文芸』、第7巻第1号、1965年1月 p.49

三者の蔵書に共通するものであり、これらは明治初年にもっとも広く読まれた中国小説と推測している。

鷗外の所蔵本に朱書きと墨書きの書入れがある。巻3の「冒姫董小宛伝」は才子佳人の恋愛悲劇で、女性主人公の董小宛は楽籍の芸者である。結末のところに、『板橋雑記』に同じ人物董小宛を描いた段落から詩を4首欄外に抜き書きしている。前述したように、前田氏はこの「丁丑初秋」の時期から『虞初新誌』を読んだ時期を推測したのである。「板橋雑記」は明末清初の作家余懐が秦淮地域の芸者の景色を描写した作品で、有名な芸者が簡潔に紹介され、董小宛はその中の一人である。董小宛を描いた段落では、呉梅村が董小宛を詠んだ四首の詩がある。

主人公の董小宛は容貌や才能が優れ、明末に有名な芸者でありながら気高く、自然の山水に親しむことに憧れている。名門の才子と思い合い、才子の妾になって、水入らずで九年を生活した後、27歳の若さで亡くなっている。呉梅村の詩も二人の恋愛や董小宛の死を慨嘆した内容である。この董小宛は鷗外の後期の小説「雁」（明治44年～大正5年）の中で言及した「小青伝」を連想させる。「雁」は医学生の青年が高利貸の妾と恋心を持つようになった話で、鷗外の医学生時代の生活をもとに創作した小説であった。主人公の愛読書として同じく『虞初新誌』に収録された「小青伝」をあげている。小青も美人で才覚に優れた人物で、運命に恵まれず、自身の不平と悲しみを詩に託して、18歳で亡くなった不幸な女性である。董小宛と小青はともに才能が抜群の美人で、不幸な運命にあった人物であり、鷗外はこのような奇女子に興味深く読んだことが見られる。中国小説に語られている才子佳人の恋物語や不幸な運命の中に生きていた奇女子の姿に青年期の鷗外の心が惹かれていた。

『虞初新誌』に詩の書入れ以外に、感想めいた朱筆の書入れもほかにある。第13巻の「補張靈崔瑩合伝」は才子佳人の物語である。男性主人公が不幸に陥って、発狂するシーンに「狂如此亦太不俗」（この如く狂うのもあまり普通ではない）と書いて、奇妙なストーリーに対する感想を述べている。『虞初新誌』に収録された題材は多岐にわたっているが、ほとんど伝奇的な要素の濃い作品や特異な人物の話である。鷗外が伝奇的な作品を面白く読んで、刺激を受けていた姿がこの書入れから推察できる。

第20巻の「三儂贅人廣自序」に矢を射る技を磨いて努めて練習したあとに、ようやく腕が上達したことを描いた段落に、「人不貴自然 貴勉然 性不可恃 而習有可通」（人は本来の状態が重要ではなく、勤勉であることが重要である。本来の性質は頼りにならないが、繰り返して練習することによって得ることがある）に傍点をつけ、「不磨之言」（すりへらすことのない言葉）と称賛している。漢文の経典を勉強して人生の知恵を学ぶように、物語も教訓や人生の知恵を学ぶ素材となっている。

次に、作者は自分の経験に基づいて人生には恐れるべきものは三つあり、その中の一つは「畏笑面多機智人」（顔笑って計算高い人を畏れる）をあげ、見栄えを重視し、裏で悪事をする人に対して皮肉を言うところに、鷗外は「此言有味」（味わい深い言葉である）と書き込んでいる。前例と同じように人生の教訓を得ている。人生の智慧を簡潔な漢文で表現し、つまり戒める格言のような表現に鷗外が共鳴している。『虞初新志』は流暢な漢文で綴られている文言小説集である。四書五経、左国史漢などの漢文経典に通じていた鷗外は、文言小説を読むとき、それが小説であるにも関わらず、経典を読むのと同じ感覚で文言小説から勉強する傾向がある。「雁」の中に、主人公は「虞初新誌が好きで、中にも大鉄椎伝は全文を諳誦することが出来る程であつた」⁵との記述がある。また、「中国の『虞初新誌』は、幕末から明治の始めに、わが国の漢学書生が熟心に読んだ書で、その中にある魏叔子の「大鉄椎伝」とか侯雪苑の「李香君伝」とかは、鷗外は暗誦していたといっていたと思う」のように神田喜一郎⁶による記述がある。『虞初新誌』を愛読したのは明治初期において鷗外独自の嗜好ではなく、同時代の知識人にも同様のことが認められる。続いては自身の作品の中でその愛好を明言した二葉亭四迷と夏目漱石と比較し、鷗外の『虞初新誌』に対する愛好を考察していく。

二葉亭四迷は『国民之友』第48号の付録（明治22年4月）の「書目十種」に『魏叔子文集』をあげている。また、「予の愛読書」（明治39年）に、文章ではゴンチャロフが好きで、ドストエフスキーが一番好きとした。魏叔子は清初の文章家魏禧であり、『虞初新誌』に収録された「大鉄椎伝」の作者であり、忠臣、孝子等の伝記や史論に長じており、自分の国や民族に対する愛着が深い人物で、これは経世計民を理想とした四迷と通じるところがある。四迷自身が「私のは、普通の文学者的に文学を愛好したといふんじゃない。寧ろロシアの文学者が取り扱ふ問題、即ち社会現象（中略）を文学上から観察し、解剖し、予見したりするのが非常に趣味のあることなつたのである」⁷と語ったように、四迷は経世計民を理想とし、自分の理想や運命と深く関わる姿勢で文学を扱っている。

それと照合してみると、前述の書入れから鷗外は才子佳人や奇女子の物語に熱中する読み方、また漢学経典を勉強するという学問的な態度が見える。鷗外は藩主に仕える典医の長男として生まれ、漢学が身につけるべき武士の素養である。漢文学の勉強は立身出世の目標に繋がる行動でもある。一方、恋愛物語を読む時、その実用性を忘

5 『鷗外全集』、第8巻、岩波書店、1972年6月 p.498

6 神田喜一郎、「鷗外と漢文学—その周辺について—」、『図書』、第267号、1970年11月 p.13

7 『二葉亭四迷全集』、第5巻、岩波書店、1965年1月 p.266

れ、幻想的な物語の世界に没頭し、自分を忘れたような姿勢で中国小説を読んでいた。これは自分が関心を寄せた社会問題に答えを求める四迷の読み方とは大きな相違を示した。

鷗外は漢文小説を読む時に、学問を摂取する読み方と幻想的な世界に思いを馳せるような読み方がある。言い換えれば、中国文学に託している鷗外の思いは二つの世界に分けている。一つは価値や権威性のある学問の世界で、そこに自分の知らない言葉の表現と新しい言葉から得る新しい知識や教訓があり、優れた学力で知識を得る満足感もあり、またそのことにより評価され、家族の光栄になる一般的な価値もある。この学問の世界に鷗外は幼少時から既に抵抗なく懐疑なく受け入れていた。もう一つは幻想的な世界で、才子佳人の恋愛物語や奇女子がその中心であり、鷗外はこの世界にも没頭し、それによって現実の人生に何か利益を与えることを求めておらず、幻想的で超現実的な世界として享受していると言える。

漱石も同じく『虞初新誌』収録の「大鉄椎伝」を好み、作品の中で言及したことがある。『満韓ところどころ』(明治42年10月～12月)四十二では宿屋の外の景色を描き、「今考えると、中々風流である。筆を執ってかいていても、魏叔子の大鉄椎の伝にある曠野の景色が眼の前に浮かんでくる」⁸と記して、「大鉄椎伝」の景色の描写を連想している。「木屑録」(明治22年9月)の中でも山の景色に対して「叔子之所謂孤劍削空従天而仆者」(叔子の所謂一本の劍が空を削って倒れてくるものである)⁹と同じく景色の描写の連想が見られる。さらに、「大鉄椎伝」をめぐって俳句も作っている¹⁰。いずれも景色の描写のもとに展開している。漱石は幼少時から漢文を好み、明治14年から15年にかけて二松学舎で漢学を勉強していた。明治22年9月に漢文体の「木屑録」を創作したのは、明治22年正月に正岡子規に知遇を得て、明治22年5月に完成した子規の漢詩文集『七艸集』から刺激を受けたからのこととされている。漱石と同様に幼少時から漢文が好きな鷗外は明治7年、13歳のときに漢文体の「後公明天皇論」を書いた。家族の期待や一家の運命を担う長男の使命感から、漢文学の勉学を当たり前のこととして受け入れた鷗外と異なり、漱石の漢文学の創作欲は子規から刺激を受け、意欲的に創作するようになったのである。鷗外と漱石における類似した状況は西洋文学の受容にも見られる。鷗外が医者として育つことは生まれた時から決まっていたことなので、オランダ語の勉強が必要であり、明治4年から藩の蘭医室良悦にオランダの文典を学んでいた。また、東京に上って、東京医学校に入るためにドイツ語を

8 『漱石全集』、第8巻、岩波書店、1966年7月 p.249

9 『漱石全集』、第12巻、岩波書店、1967年3月 p.447

10 明治29年の作品で、題目は「魏叔子大鉄椎伝一句」である。

学ぶのも当然のことである。その後洋行した時も、読書が好きな鷗外がドイツ文学を中心とした西洋文学に耽読したのも自然な成り行きになる。鷗外は漢文学も西洋文学も抵抗なく受け入れたのに対して、漱石は東京大学英文学科から卒業し、後に洋行に至るまでにも、西洋文学とは何かに疑問を持っていた。「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも関らず、文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり」、「学力は同程度として好悪のかく迄に岐かるるは両者の性質のそれ程に異なるが為めならずんばならず、換言すれば漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず」¹¹ というように、英文学とは何かについて、懐疑と苦悩を示した。

先に考察したように、『虞初新誌』に鷗外が学問的、幻想的という二つの世界を見取っている。学問的な世界は鷗外にとって、漢文学の修業の延長として見える。小説に対しても漢文経典と同様の態度で知識や教訓を獲得している。

2. 『石點頭』の読解

真善美の一体論を主張したしのぶ（巖本善治）の「「文学と自然」を読むを謹読」¹² と「現今の文学」¹³ を批判し美の独立性を主張した。美は必ずしも真と善とを伴わないことについて鷗外が力を入れて論じていた。小説の真や善などモラルの傾向を抵抗するが、自然と小説を読んで感化されることがあれば、それを排斥せずとして、ツルゲーネフの名があげられる。続いて「石點頭」の序文から原文を引用する。

古人の云く＝小説家推因及果。勸人作善。開清浄方便法門。能使頑夫偃子。積迷惑頓悟（小説家は原因を押して結果に及ぶ。人に善行を為すことを勧め、清浄方便法門を開く。愚人や小児にも悟らせる）＝と是れ亦た太だ好し而れども是勸善懲惡の結果は決して此小説の目的に非ず此小説は美を以て目的となし。（p.15）

ここで、鷗外は小説において自然に勸善懲惡の結果になればそれでもよいが、道德のモデルを作るのは小説の目的ではないと説いている。ここに引用された『石點頭』は明代の擬話本小説集で全14巻あり、それぞれ独立した話から構成される。鷗外文庫に所蔵され（金閩葉敬池刊行、天然痴叟著、墨憨主人評、馮夢龍序）、文体は文言

11 『漱石全集』、第9巻、岩波書店、1966年8月 pp.9-10

12 『女学雑誌』、第162号、明治22年5月

13 『大同新報』、第6号、明治22年6月

小説の『虞初新志』とは異なる白話小説である。馮夢龍の『情史』がその主な出典に措定され、馬琴によって『石點頭』を翻案した作品が残される¹⁴。

鷗外文庫書入本画像データベース¹⁵には、ドイツ留学以前に繙読された可能性が高いとされる。明治30年5月刊行の翻訳集『かげ草』に鷗外の妹の小金井喜美子によって、『石點頭』に収録される「人肉」の翻訳が載せられ、妹の喜美子はその文学修業に鷗外から大きい影響を受けている。明治44年9月に訂正再版が発行されたとき、鷗外は「重印蔭艸序」に「舊宮人。菊と水と。皮一重。人肉。此四篇は支那の小説を譯せるなり。當時學海先生などの試み給へるを見て、きみ子が顰に倣ひにや」と語っている。『石點頭』は前述の『虞初新志』ほどの人気はないが、それでも鷗外の視野に存在し続けていることが窺える。

『石點頭』にも数少なくない書入れが見られ、興味深く読まれたと考えられる。第三巻「王本立天涯求父」は孝行に関する話で、冒頭の部分では親孝行は口だけで行動に出せない人はオウムが人にならって念仏を唱えるようである（説出来恰像鸚哥学念阿弥陀佛一般）の欄外に「鸚哥一譬諭解頤」（オウムのたとえに感服する）との感想がある。このような感想は小説より言葉そのものへの関心を示している。小説という文学作品というより、むしろ知識や語彙への関心が見られる類のものである。第5巻「莽書生強凶鴛侶」で科挙試験に合格人について、両親健在は「具慶」、父健在母逝去は「嚴侍」、母健在父逝去は「慈侍」というところには「好典故」と書くのも、前述の例と同様に未知の言葉への関心である。

第10巻「王孺人離合团魚夢」は運命の翻弄によって離散した夫婦がまた巡り合う二つの話であり、貴族によって庶民の妻が奪われる段落には「陋習可歎」と書いている。二つ目の話で、悪人の仕業によって離れ離れの夫婦が数年後、人の善意によってまた一緒になれた日の光景が描かれている。仇をとろうという意欲を示した妻に対して夫が、しばらくそのことを忘れてまた後日で考えようと話した段落に墨憨主人による「口会合後 即忘旧讐 亦何足重 惟其念念」（即旧讐を忘れ、重んじるに値することがなく、唯その刹那のこと）との評があった。その評に対して鷗外が「十二字刺心之語」

14 大高 洋司、「文化三、四年の京伝、馬琴と『桜姫全伝曙草紙』」（『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』、第34号、2008年2月）は、『稚枝鳩』は『石點頭』十一「江都市孝婦屠身」、十二「侯官鼎烈女磯仇」から、『苧萱後伝玉櫛篋』は「石點頭」一「郭挺之傍前認子」から取材している可能性を示した。

15 <https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogai/document/bfdc52ad-1b0a-4cdd-9727-7500ac5d33fc#?c=0&m=0&s=0&cv=4&xywh=-1347%2C-210%2C7026%2C4191>（最終閲覧日：2021年9月14日）

(十二字心を打たれる言葉)と書入れた。ここに娯楽としての読書の傾向がある。巻中の人物に起きたことに同情したり、感慨したりする読み方をしていた。論理的に考えるより、直感で感じたことを書いたと思われる。また、この巻では夫婦が離散しても、妻がずっと夫のことを思い、また会える日を待つといった妻が造形されている。『石點頭』では、この巻にもっとも書入れが多く、夫婦の離散や再会に感慨を覚えるものが多い。それはまさに鷗外が学生時代の体験に基づいて書いた小説「キタ・セクスアリス」の中に書いたように、「初て梅暦を又借をして読んだ頃から後、漢学者の友達が出来て、剪燈余話を読む。燕山外史を読む。情史を読む。かういふ本に書いてある、青年男女の naively な恋愛がひどく羨ましい、妬ましい」¹⁶ といった読書の感覚である。

「現代諸家の小説論を読む」において、これが中国小説から2回目の原文引用となる。明治初期に、漢文は基礎的な素養だといえども、この批評でかなり意識して頻繁に引用した『小説神髓』と対照してみれば、中国文学作品に対する親近感や議論における重みづけが違っていたことがわかる。

『小説神髓』に戯作の作者や作品を多く列挙していた反面、中国文学作品についてはただ李漁と莊子に言及したのである。しかも、「このあひだの戯作者流はひたすら李笠の語を師そして意を勸懲に発する(後略)」¹⁷と述べ、勸善懲悪の文学の代表格として批判した。逍遙と鷗外の間に見られた漢文学に対する態度の差は、幼少時から漢文学を勉強した体験に深く関わると考えられる。

逍遙は6歳頃から漢籍の素読、習字を始め、それを教えた先生は逍遙の長兄、ほかに次兄、姉婿等である。逍遙によると、勉強の出来が悪く、叱られた経験が多かった。「学問が嫌ひになる」、「十歳の暮となっても、「四書」の素読さへもまだ甚だあぶななく」¹⁸と回想している。このように、最初に漢文と接した思いは良いものだったとはいえない。むしろ逍遙は後に草双紙、読本や芝居に心を惹かれたことが文学開眼の契機となっている。一方、鷗外は6歳から藩儒に論語や孟子を学び、8歳から養老館に四書復読に行き、勉強の出来が良く藩校から賞状や賞品が授与された経験がある¹⁹。幼少時の学習体験は後年の漢文学への感覚も大きく影響したと思われる。

明治44年4月に発表された「鼎軒先生」²⁰に、鷗外が東洋文化と西洋文化の両方に立脚する学者は二本足の学者として、「一本足の学者の意見は偏頗」で、「時代は別に

16 『鷗外全集』、第5巻、岩波書店、1972年3月 p.141

17 「緒言」、『明治文学全集16 坪内逍遙集』、筑摩書房、1984年2月 p.3

18 「歌舞伎の追憶」、『逍遙選集』、第12巻、春陽堂、1927年7月 p.70

19 小金井喜美子、「不忘記」、『森鷗外の系族』、岩波書店、2001年4月 p.37

20 『鷗外全集』、第26巻、岩波書店、1973年12月 pp.422-423

二本足の学者を要求する」として、東西の文化を兼修する学者を高く評価した。少年時代の鷗外はここまで明確に意識していないかもしれないが、議論の論拠は常に和漢洋の例をそれぞれ挙げたことからみれば、そういった意識は若い頃からすでに存在したのである。

鷗外は『石點頭』の序文を引用し、小説によって自然と勸善懲悪の結果になればそれも排斥しないが、それは決して小説の目的ではなく、小説の目的は美であると論じている。『石點頭』の序文からの引用は、「神曲」、「失樂園」、「西遊記」、「獵人日記」とともに、美の価値を論じる時に、相手に反論する武器として使われている。

医学生時代の鷗外が『石點頭』を読む時に、学問的な好奇心や幻想的な世界に興味深く読んでいた。学問的な関心は鷗外が成長した環境や自身の才能から自然に生まれた関心であると同時に、立身出世の使命にも繋がることなので、鷗外にとっては内外両面からの欲求だと言える。その反面、儂い男女の恋愛物語や不運に遭遇する女子を中心とする幻想的な世界は、現実世界の鷗外にとって世の中で身を立てることに干渉せず、鷗外自身の内的欲求だと思われる。『虞初新誌』と『石點頭』を文学理論の批評に生かした際、学問的な面を意識して論戦の武器として使っている。中国小説に学問的価値と幻想的雰囲気求めていたことが分かる。

3. 『第五才子書水滸傳』へのまなざし²¹

鷗外は小説のジャンルについて、単稗と複稗という新しい分類の基準を作り、それぞれ実例を挙げながら考察した後、また議論を心理的観察に戻している。散文の隆盛とともに、作家は心理的観察法を使って個性的に描写することは可能になったが、「此心理的観察法は必ずしも春の屋主人（引用者注、坪内逍遙）を待て東洋の詩学界に顕出せしに非ず」（pp.17-18）と述べた。『第五才子書水滸傳』の序文から引用した。

和漢の批評家は既に此に注意したるとあり金聖歎は水滸傳を評して云わく＝水滸傳写一百八箇人性格、真是一百八様。若別一部書。任他写一千箇人。也只是一様。便只写得兩人。也只是一様（水滸傳は百八人を描き、それぞれの個性がある。他の本は千人を描いても性格は一人に見える。たとえ二人を描いても性格は一人に見える）と是れ其一証なり。（p.18）

21 第3節の内容は、「《読現代諸家的小説論》中的森鷗外与《水滸傳》」（『語言文化学刊』、第7号、比較語言文化学会、2020年11月、pp.107-111）として、中国語に要訳した。

これは明末清初の批評家金聖歎によって水滸伝の人物はそれぞれ個性があると称賛した一文である。『小説神髓』が発表されて以来、小説の流行とともに心理的観察法の有効性が盛んに主張されているが、和漢の批評家は既にこの点に注意していたと述べている。ここには前に引用した両作品と同じく肯定的な姿勢を見せている。従来の研究で明らかにされていることであるが、「現代諸家の小説論を読む」で鷗外の文学理論はゴットシャルやハイゼに学びながらも鷗外自身の文学論を主張している。西洋の文学理論を生かして議論を展開しながら、中国小説の三作品を引用し、古い東洋の文学著作にも同様な記述があるといった肯定的な態度を見せている。『第五才子書水滸伝』の序文からの引用は、それによって新しい情報を提示するより、漢文作品の文句を借りて、自分の立論を強化するような機能を持たされている。

「現代諸家の小説論を読む」では心理的観察法に続いて、鷗外は文壇にある小説の文体を間違っして小説の流派とすることを指摘し、また『第五才子書水滸伝』の序文から金聖歎の文を引用している。「吾旧聞有人言。莊生之文放浪。史記之文雄奇。始亦以之為然。(後略)」(p.21、私は曾て聞いたことがある。莊子の文章は浪漫的で、史記の文章は雄大である。最初はその通りと思っている)という金聖歎の言葉を借りて、議論の相手の問題点を指摘した。鷗外は自分の理論を強く主張する場合、あるいは相手を反駁する等の場合に漢文作品の原文を引用し、雄勁な漢文体の力を借りて論証する傾向が見られる。

『水滸伝』は江戸時代から日本で広く流布し、読まれている。四大奇書について鷗外の妹小金井喜美子の回想がある。兄の洋行の日が決まり、「それまでも唐本の古本を、よく見つけてお兄い様に買わせなさいました。四大奇書の帙入など、大学へ献本になった今もきっとあるでしょう」²²。鷗外文庫が所属しているのは明羅貫中撰、清金聖歎批註、雍正12年刊行の75巻の『第五才子書水滸伝』である。鷗外文庫に所蔵されるグスタフ・ファイザー著『マルティン・ルターの生涯』には「描叙英雄氣象、文有生色」(英雄の気概を描いたのは生き生きしている)、「若読水滸伝」(水滸伝を読むが如し)などの書入れがあり、『水滸伝』の登場人物の描写を高く評価している。

『第五才子書水滸伝』は明末清初の批評家金聖歎が編集して注釈をつけた『水滸伝』である。金聖歎は莊子、離騷、史記、杜詩、水滸伝、西廂記を才子の書として、『水滸伝』と『西廂記』をそれぞれ「第五才子書」と「第六才子書」として出版している。金聖歎は明末清初における小説理論の集大成者とされ、体系的な小説理論を作り、新たに

22 小金井喜美子、『森鷗外の系族』、岩波書店、2001年4月 p.98

小説を評点する様式を完成している²³。『清代文学評論史』によって、金聖嘆について以下の記述がある²⁴。

彼の出現以前明代の戯曲小説評点本は概ね文の妙所に圈点を打って読者の注意を促し、簡単な評語を加へたもので、当時行はれた時文即ち科挙の答案文や古文の評点法を応用したものである。然るに聖嘆に至って其の法を拡張し、先ず「読法」として一書の総論を記し、而して一篇毎に先ず概評を下して後、本文に入って一々其の用筆の妙を指摘する方法を取り、其の綿密なことさながら古典を註するが如くである。而して此等戯曲小説の文学的価値を莊子・楚辞・史記の如き古典と同等の地位に置こうとするのが彼の「才子書」に企画したところである。

『第五才子書水滸傳』は、小説の読法に注目し編注した『水滸傳』である。鷗外が先述の『石點頭』、『虞初新志』と同様に、金聖歎の序文から引用した。人物の描写は類型化に陥ることなく、一人ひとりの個性を活写していることを称賛している。鷗外も金聖嘆と同様に、逍遙が提唱した心理的観察法は和漢の批評家が既に気づいたと述べていた。逍遙の主張を認めながらも、金聖嘆の文を引用し、同様な主張をしたのは逍遙のみではなく、既にほかの批評家も気づいたことを証明した。

鷗外文庫の『第五才子書水滸傳』の序文にはかなりの注点や傍線が施されている。「序一」に「材」、「裁」、「構思」、「立局」、「琢句」、「安字」など作文の技法を論じるキーワードを赤い枠で囲んでいる。巻3の「読第五才子書法」は金聖嘆によって『水滸傳』の人物と小説の作法が論じられている。「現代諸家の小説論を読む」で引用された「水滸傳写一百八箇人性格真是一百八様」(p.18)は「読第五才子書法」より引用され、原典は「真是一百八様」に傍点がつけられ欄外に「個人」と書いている。金聖歎が『水滸傳』の個性的な描写を称賛し、この文に鷗外も感心した様子が見られる。さらに、小説の技法を論じた段落に、「倒挿法」(後に起きた重要なことを先に書く方法)、「夾叙法」(二人の発言を同時に叙述する方法)、「草蛇灰線法」(細かい描写によって伏線をはる方法)、「大落墨法」(濃密な描写をする方法)、「綿針泥刺法」(針が綿の中に隠れるよう暗に皮肉する方法)、「背面鋪粉法」(反対のものと対比によって強調する方法)、「弄引法」(大きい物語を書くために、その前に小さい物語を書く方法)、「獺尾法」(物語を急に終わらせないように、関連する人物や景色を描いて滑らかに結

23 黄保真・蔡鐘翔・成復旺著、『中国文学理論史』、北京出版社、1987年12月 p.639

24 青木正児、『清代文学評論史』、岩波書店、1950年1月25日 pp.293-294

末する方法)、「正犯法」(同様な主題を全く相違の描き方をする方法)、「畧犯法」(若干類似する主題を全く相違の描き方をする方法)、「極不省法」(物語の一部始終を細かく語る方法)、「極省法」(物語を単刀直入に始める方法)、「横雲断山法」(長文の叙述において単調を避けるために他のエピソードを挿入する方法)、「鸞膠続絃」(並行する物語を合理的に交錯させる方法)のような技法に傍点をつけ、枠で囲んでいた。

『第五才子書水滸傳』の書入れに明らかに『石點頭』、『虞初新志』に見えた読者的な趣味と違い、小説の技法などに注目する文学者の関心が現れてくる。医学生時代の読書活動の進展とともに、中国文学作品への関心は単純な読者的な関心にますます文学者的な趣味も加わり、小説を読む読者から小説を作る側に関心を持つような傾向もある。

『第五才子書水滸傳』のほかに、鷗外文庫に姚宗鎮編、鄭國揚校 25 卷 115 回の『新刻全像忠義水滸誌傳』も所蔵されている。本文に読点が施されており細かく読まれていた形跡が見える。目録に毎回の題目を『第五才子書水滸傳』と照らし合わせ、両者が異なる箇所にも『第五才子書水滸傳』の題目を書き加えている。第 66 回の後に「以下聖嘆削去」と記して、欄外に「聖嘆本比較 癸未七月」と書いてある。癸未は明治 16 年であり、洋行前に『第五才子書水滸傳』を読んだことが分かる。

日本において『水滸伝』が流布する速さや広さ、そして鷗外の漢文素養から考えると、明治 16 年にはじめて『水滸伝』を読んだ可能性は極めて低い。明治 16 年 6 月から成島柳北、伊達邦成、土生柳平校の『第五才子書水滸傳』が 3 回分けて出版されている。成島柳北をはじめ、有名な学者の名前が続々現れている。「第一冊の初めに依田学海の序がある」。「第十二冊の終わりに重野成斎と信夫恕軒の跋がついている」²⁵。『水滸伝』は人気書とはいえ、成島柳北、依田学海など影響力の大きい儒学者の名が並べられたこの本が出版されたことを契機として、鷗外が『第五才子書水滸伝』を再び手にとって読んだ可能性が高かったと考えられる。依田学海は鷗外の漢文の師であり、成島柳北は鷗外が愛読した雑誌『花月新誌』の編集者であるように、有名というだけでなく、鷗外にとって親近感のある知識人が関与していた。明治 16 年に出版された『第五才子書水滸傳』が鷗外の『第五才子書水滸傳』を再読する契機になったと思われる。

また、時代を 30 年代まで下れば、明治 30 年 8 月 26 日に発行された『めさまし草』第 20 巻の「標新領異録 水滸伝」に三木竹二(次弟、森篤次郎)、鷗外、依田学海、森田思軒による『水滸伝』の合評がある。これは長い文であり、極めて学問的な態度

25 高島俊男、『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』、大修館書店、1991 年 2 月 p.222

で『宣和遺事』等の歴史書に基づき、歴史的事実と小説内容を対照して考証的に論じていた。歴史的記述から、小説の成り立つ過程を推測し、後年の歴史小説をめぐる「歴史其儘と歴史離れ」の問題は、早くもここに萌芽が現れた。議論の結末部分で『水滸伝』の現実的な意味について若干触れていた。「支那にはなぜに匪徒が横行するか。支那の官兵は何故にこれを蕩平することが出来ぬか。これは宋時既に有る問題で、今に至るまで未だ解釈せられぬ。私は水滸を読むごとに、未だ曾てこれに想ひ到らざることない²⁶」と述べた。漢文小説を読んで現実の中国を連想させたのは、『虞初新誌』と『石點頭』に見られないことである。「現代諸家の小説論」の中で言及した漢文小説の読み方は、学問の摂取や異国情調を目当てに読んだ部分が多く、そこから現実の中国まで連想を及ばない傾向がある。この傾向は『支那游記』（大正14年）の中で『水滸伝』に多く触れた芥川龍之介を想起させる。

『水滸伝』は日本作家との関わりという視点から考えれば、『水滸伝』を最も多く扱っていた作家は芥川龍之介とされている²⁷。中国への旅行を記録した『支那游記』に『水滸伝』の人物が度々思い出された。日本で愛読され、日本文学に定着した小説『水滸伝』は現実の中国と重なる場面がある。しかし、鷗外初期の批評文にはこのような傾向が見られず、漢文小説を遠い世界のものとして享受し、それをディスタンスのある世界の一つの風景として眺め、実世界の中国までに連想は及んでいない。少なくとも当時の現実問題と関わりのある視線で読んでおらず、遠く古の歴史上の中国がもたらした異国情のある文学作品として楽しんでいたと考えられる。現実世界の中国を連想することなく、あくまでも心惹かれた遠い世界として扱う姿勢である。それは一貫して、美を小説の最高の目的として、一切の道徳的な教化を排斥した理想的な世界を構築したいという鷗外の文学理念に通じると思われる。また、斎藤希史氏²⁸の考察によれば、1880年代に入ってから、日本には「和漢」の関係を考え直して、日本文学史を作る動きが現れる。「〈日本〉の輪郭を明確にしようという指向も確実に存在し、だからこそ、和/漢と日本/支那とは別の位相に属するものとして把握されている。ここでは〈日本〉に含まれているのは〈漢〉であって〈支那〉ではなく、「漢文」はあくまで「漢文」と記され、「支那文」と記されることはないのである」としている。鷗外の姿勢の背景にはこのような事情があると思われる。

26 『鷗外全集』、第24巻、岩波書店、1973年10月 p.546

27 高島俊男、『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』、大修館書店、1991年2月 p.205

28 斎藤希史、『漢文脈の近代』、名古屋大学出版社、2005年11月 p.24

おわりに

中国において文学理論が詩文を中心とする状況は万曆から明末の間には変わり、小説、戯曲を主な対象とする文学理論が展開している。この時期に有名な文芸評論家も小説、戯曲の評論家であり、もしくは詩文と小説、戯曲の両方を評論するのである。明治20年代以降小説はかつてないほどの勢いで発展している。中国でも日本でも詩文と小説という上下の秩序が崩れる傾向を示している。こうした状況を背景に成長した鷗外には小説より実用の文学の詩文が優位だという上下の文学の価値観はなかった。

読書の時期からいえば、批評文に引用されたのはほとんど洋行前の学生時代に愛読した本である。明末清初の作家を好んで読んでいた。和漢洋という三項対立で論じた傾向があり、和漢洋の三つの世界に立脚し議論を展開した特徴が多く見られる。この点では論駁する文章も同様の特徴がある。和漢洋の知識を活用して論を進める方法は鷗外が反論した相手も同じであった。その扱い方の違いはどこにあるかといえば、論争の相手の文脈では和漢洋の要素が共存する当時の文学界から捨てられるべきものと見なされた中国文学は、鷗外にとっては権威性のある論拠として漢文の原文が引用されていた。中国小説の序文の中の記述を権威性、信憑性のあるものとして、論拠に用い相手に反論したのである。

また、鷗外が若い時期から歴史小説創作の問題を考え始め、たとえば、『水滸伝』研究に見られたような歴史と小説創作の問題は後年まで続いていた。鷗外は中国文学をどう考えたかという問題は、鷗外の文学理論と文学創作に始終関わっていたと考えられる。